

富田光美が相模大山に伝えた倭舞・巫女舞

——歌譜とその背景——

飯田 隆夫

〔抄録〕

明治六年七月、権田直助は相模大山阿夫利神社の祠官としたが、神仏分離後の混乱した山内の改革を幾つか行ったが、そのうちの一つが奈良春日大社に伝わる倭舞・巫女舞を富田光美から伝習することであった。その伝習当時の倭舞歌譜が伝存されているが先行研究者はその歌譜と奥書に注目した。富田光美の家系は途絶していてこの歌譜の原本の存在は不明である。明治元年以降、春日社社伝の倭舞・巫女舞は富田光美夫妻によって全国に伝習されたが、先行研究と大山阿夫利神社・金刀比羅宮・春日社の歌譜を比較検討によって大山阿夫利神社の歌譜が原本に近いとの推定が可能

能である。富田光美は幕末期から明治維新の転換期に神社国家神道化の下、神社に奉納される神楽は富田家が相伝してきた倭舞・巫女舞が古儀に倣う最も相応しいものとして、白川家関東執役古川躬行や明治政府の後ろ盾で全国著名神社に伝習した。その伝習内容と背景を相模大山と関連させ論考をはかる。

キーワード 倭舞歌譜 富田光美 巫女舞 東幸と雅楽制度
芸能統制

はじめに

明治六年七月三〇日、権田直助は相模大山阿夫利神社祠官に就き、その後、大山御師の檀廻組織の実態調査、大山敬慎講社設立、春日大社に伝わる倭舞・巫女舞神楽を富田光美より伝習、社殿修復など独自

の改革を自ら着手した。権田の祠官就任以前、明治三〇五年の間、社殿では奉幣講として天津祝詞・神供祝詞・奉幣祝詞などを定めた「奉幣式目」が奏上されていた。権田は神社へ参詣者を導くため社殿祭事を古儀に倣う神楽として春日社の倭舞・巫女舞の伝習をはかった。

大山阿夫利神社に伝えられた倭舞・巫女舞の調査・研究の初見は永

田衡吉の「大山阿夫利神社の神楽」⁽¹⁾においてである。永田衡吉は大山阿夫利神社の神楽舞を第一帖摘録として「倭舞歌譜」、第二帖摘録として「巫女舞歌譜」をその神楽の舞振とともに調査した。本田安次は、同社の神楽の歌譜をさらに精査し、「春日の八乙女舞歌」でその歌譜の内容を調査し⁽²⁾、この両者の研究により、明治八年当時大山阿夫利神社に伝習された春日社の倭舞・巫女舞の全容が判明している。

春日社の社伝神楽の全体像は二つの調査報告によって解明されている。一つは、春日大社に伝わる巫女神楽を史料・諸伝本・舞型・装束の面から明らかにした『春日大社社伝神楽調査報告』⁽³⁾があり、他は、倭舞・巫女舞の伝承、春日社社伝神楽が明治維新以後、各地に伝習された比較調査、和舞の伝承と金刀比羅宮・出羽三山神社などの比較をした「和舞・社伝神楽の伝承並びに比較調査報告書」⁽⁴⁾がある。これらの報告書によって春日社の倭舞・巫女舞の伝承実態と明治維新以後、神道国教化政策を背景に春日社社伝神楽が全国神社へ広く伝習され、それには富田光美が深く関与したことが明らかとなっている。この神楽伝習の報告は春日社社司であった富田光美が残した諸資料に基づかれているが、岩田勝は「春日社における神楽祭祀とその組織」の論考の中で富田光美の諸資料には作為性が含まれ、史料批判が必要であることを指摘している⁽⁵⁾。この諸資料とは、明治三年五月「やまかづら」⁽⁶⁾、明治三年九月「やまとまひ歌譜」⁽⁷⁾、明治七年「藤のしなひ」(「巫女舞歌譜」⁽⁸⁾、明治一六年「倭舞伝習ノ式」⁽⁹⁾など富田光美の著作を指す。

本稿では、岩田勝の指摘に留意しつつ春日社の倭舞・巫女舞の歌譜を大山阿夫利神社・金刀比羅宮にそれぞれ伝習された歌譜とを比較検

討することにより差異を再検証し、富田光美が春日社の倭舞・巫女舞を社外の諸社に伝習した時代背景と意義を探ろうとするものである。

第一節 大山阿夫利神社に伝習された倭舞歌譜

春日社社伝の倭舞・巫神楽の伝習は明治八年より始められたが、伝習の完了には明治一五年までの七年を要した。春日社に倭舞を相伝した富田光美は、同家に所蔵されてきた歌譜を諸社への伝習本として明治三年「やまとまひ歌譜」を著した(史料一A)。この歌譜は神主舞歌として「梅枝」「真榊」「常世」「計歌」の四首、諸司舞歌を八首と神前儀式用の「幣歌」「御饞歌」「御酒歌」「立歌」「直会歌」「志多良歌」六種十一首で構成され、これをもとに富田は倭舞を諸社へ伝習した。明治九年十一月富田光美が大山阿夫利神社へ伝習された歌譜の内容が永田衡吉の調査による大山の「倭舞歌譜」第一帖摘録で(史料一B)、春日社と大山阿夫利神社とを対比した相違が次の三点である。歌譜の採否

「やまとまひ歌譜」に採録されて大山「倭舞歌譜」にない歌譜(「印」が「常世」「三歌別歌」「幣歌別歌」「志多良歌」の五歌に対して、大山「倭舞歌譜」に採録され「やまとまひ歌譜」にない歌譜(「印」は「音取」「進歌二歌」「櫛酒歌」の三歌である。

配列の違い

「やまとまひ歌譜」が「神主舞歌」「諸司舞歌」「祭事舞歌」の配列に対して、大山の「倭舞歌譜」は「祭事舞歌」「倭舞歌」(「諸司舞歌」)、「六位倭舞歌」(「神主舞歌」)と「やまとまひ歌譜」の「神

史料一 A 倭舞神楽歌譜比較

春日社「倭舞歌譜」
〔明治三年九月富田光美「やまとまひ歌譜」春日顯彰会「和舞・社伝神楽の伝承並びに比較調査報告」七二〜七五頁／国会図書館マイクロフィルム蔵〕

史料一 B 倭舞神楽歌譜比較

大山阿夫利神社「倭舞歌譜」
〔明治九年一月富田光美書写「倭舞歌譜」第一帖摘録「神奈川県民俗芸能誌」第六編 永田衛吉 五二七〜五三一頁所収 カッコ内は永田衛吉注による〕



史料二 A 巫女舞神楽歌譜比較

春日社「神楽歌譜」

(明治七年九月富田光美写「藤のしなひ」『日本庶民文化史料集成』第一卷一九七四年所収)

舞の初にまをす詞

此のやをとめ。たがやをとめぞ。ちハやふる神のみまへにたつや。はなのやをとめ

発題四首完備 舞員不定 詞一首毎曲換而唱之

一の歌 若宮の。みかげうつろふ。ますかゞみ。くもりあらせて。かへりみたまへ

二の歌 珍らしな。けふのかぐらの。やをとめ。神もうれし。みまきまらめや

三の歌 神のます。かすがのほらに。たつや八処女。やをとめ。わがやをとめ。かみのやをとめ

四の歌 神のます。かすがのほらに。たつや八処女。やをとめ。わがやをとめ。かみのやをとめ

前段一組

初めの歌 かが山。いはねのまつハ。いはねども。千年をみどりの。いろにしり

白拍子の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

中拍子の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

中のうた 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

末の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

一の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

二の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

三の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

四の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

舞の初に申す詞

此の八乙女。たか八をとめ。千早振。神のみまへにたつや。花の八處女。

めずらしな。けふのかぐらの。やをとめ。かみうれし。しのばざらめや。

若宮の。みかげうつろふ。ますかゞみ。くもりあらせて。かへりみたまへ

一の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

二の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

三の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

四の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

舞の初に申す詞

此の八乙女。たか八乙女。ちはやふる。神の御まへにたつや。花の八乙女。

かみのます。かすがのほらに。たつやをとめ。やをとめ。わがやをとめ。かみのやをとめ

まつら。かみのおまへの。やをとめ。はなもひめとく。かすがやまかな

よるづ代の。まつのをやまの。かげしげみ。きみをぞいの。ときはかきハに。ヤレ。ときはかきハに。ヤレ。

白拍子乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

中乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

末乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

史料二 B 巫女舞神楽歌譜比較

大山阿夫利神社「巫女舞歌譜」(第二帖摘録)

(明治一〇年三月富田光美書写 本田安次「春日の八乙女舞歌」『芸能』三〇巻九号所収 一九八八)

舞の初に申す詞

やおとめハたがやをとめぞ。ちはやふる。かみのみまへにたつや。はなのやをとめ

発題 一の歌

若宮の。みかげうつろふ。ますかゞみ。くもりあらせて。かへりみたまへ

二の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

三の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

四の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

舞の初に申す詞

此の八乙女。たか八をとめ。千早振。神のみまへにたつや。花の八處女。

めずらしな。けふのかぐらの。やをとめ。かみうれし。しのばざらめや。

若宮の。みかげうつろふ。ますかゞみ。くもりあらせて。かへりみたまへ

一の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

二の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

三の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

四の歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

舞の初に申す詞

此の八乙女。たか八乙女。ちはやふる。神の御まへにたつや。花の八乙女。

かみのます。かすがのほらに。たつやをとめ。やをとめ。わがやをとめ。かみのやをとめ

まつら。かみのおまへの。やをとめ。はなもひめとく。かすがやまかな

よるづ代の。まつのをやまの。かげしげみ。きみをぞいの。ときはかきハに。ヤレ。ときはかきハに。ヤレ。

白拍子乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

中乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

末乃歌 松は。いはひの。ためしにひかる。かすがのみねの。ひめこまつ。やちよのたまつばき。いはぬきがは

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

祝言 御神楽こそ。めでたふおほしめせ。いのちながう何事も。おもふ所願を。かなへさせたまへ。

舞はて。まをす舞

主舞歌・「祭事舞歌」とが「諸司舞歌」を挟んで前後で入れ替わっている。

歌譜の相違

「やまとまひ歌譜」諸司舞の第五歌末尾「つかへまつらむ」が、大山「倭舞歌譜」では「かなであそばむ」に変化しているが、他の表現は、かな・漢字の用い方やくぎり方の相違はあるが歌詞の内容は同じである。

春日社の歌譜と大山の歌譜とは諸司舞を挟んで春日社の神主舞歌譜の四歌と祭事歌譜が前後入れ替わっているのが顕著な相違である。

同じく春日社社伝の巫女舞神楽として富田光美は、明治七年「藤のしなひ」を著した。この歌譜は、「発題」四歌、「前段一組」「中段一組」「後段一組」の三段で、各段は「初之歌」「白拍子の歌」「中の歌」「末の歌」からなり、冒頭の「舞の初にまをす歌」、末尾の「舞はててまをす舞」で括られている（史料二A）。明治九年に伝習された大山阿夫利神社の「倭舞歌譜」第二帖摘録（史料二B＝巫女舞歌譜）は前段・中段・後段の三段で各段ごとに「舞の初詞」で始まり各々一・二・三段の歌の次に「初之歌」・「白拍子の歌」・「中の歌」・「末の歌」・「舞はてて申す歌」で閉じる構成である。両者の相違点は以下の五点である。

歌譜の採否

大山阿夫利神社「歌譜」にあつて、春日社の歌譜にないのは「計歌」一歌のみであり、他はすべて同歌となっている。

配列の違い

春日社歌譜「発題」のうち、「一の哥 若ミヤ」が大山の前段一組の冒頭へ、「二の哥 珍らしな」が大山の中段冒頭へ、「三の歌 神のます」「四の歌 まつらるる」が大山の後段冒頭に移動している。前後段の各段は、舞の初めと終わりに「申す歌」で括られている。歌譜の相違

二社の歌譜の相違は次の二か所に見ることができる。

①春日社「発題二の歌」「…神もうれしと。みまさゝらめや」と大山「中段一組二の歌」「…かみもうれしと。しのばざらめや」との部分

②春日社「後段一組末の歌」「…こもれる千代ハ。君のミぞミむ」と大山「後段一組末の歌」「…こもれる千代ハ。きみぞかぞへむ」との部分

繰返しの違い

春日社「中段一組 加拍子」の「…かけてこゝろをや」、「後段一組中の歌」「…ヤレはるかなるかな」、「後段一組 末の歌」「…君のミぞみむ」が大山の同歌の歌詞に対していずれも回数が多い。

一字違いの歌譜

春日社「発題四の歌」「…はなもひもとく」が大山の「後段一組」「…はなもひめとく」、春日社「中段一組 白拍子」「…ためしにひかるゝ」が大山の「中段一組 白拍子」「…ためしに。ひかるゝハ」、春日社「中段一組 加拍子」「…よすらん」が大山では「中段一組 加拍子」「…よすらむ」

などの差異がある。

このように春日社の歌譜「発題四歌」が大山の歌譜の前段・中段・後段の冒頭に分割挿入されているのが顕著な違いといえる。⁽¹⁰⁾

第二節 「倭舞歌譜」の「奥書」

大山阿夫利神社に伝存する「倭舞歌譜」第一帖・第二帖摘録にはそれぞれ以下の「奥書」の存在が知られている⁽¹¹⁾

「倭舞歌譜」第一帖摘録（倭舞歌譜）の「奥書」

「右歌曲延喜撰譜也、以梅枝、真神、宮人、閑歌等為本体唱之、凡此謠者諸社神司等專業之諸司官人、亦当神事奉仕之而歴喪乱之世、遂失其伝矣、偶存吾家者実可謂琨山之片玉、祭祀之宝曲者也 右歌笛譜

右歌笛譜

明治九年十一月、富田光美書写

明治十六年六月 謹写之、権田一作」

「倭舞歌譜」第二帖摘録（巫女舞歌譜）の「奥書」

「保安三年三月春日神宮改正之譜也

元和二年十二月 御巫槇子写

明治五年十一月 奏進

明治六年十一月 伝習被差許

同 十年三月 富田光美書写

同十六年六月 謹写之 権田一作」

ここから春日社伝の倭舞歌譜は大山阿夫利神社へ明治九年に、巫女舞歌譜が明治十年に富田光美が書写し、権田一作が明治十六年六月

に「謹写」したことが分かる。権田一作は、権田直助の孫（権田年助長男）にあたり、「大和舞巫女舞兼雅楽等教師」の資格を持った継承者である。

また「倭舞歌譜」第二帖の奥書「元和二年十二月 御巫槇子写」の表記から永田衡吉は富田家に元和二年に写しの原本が伝存されていることは明らかであると指摘し、「阿舞の歴史と実際を検討する重要資料である」と指摘した。

本田安次は、春日社に伝存する巫女舞諸伝本の検討から、「元和二年十二月 御巫槇子写」と奥書された、さすが御子・富田槇子が書写した「春日社神楽歌」本が春日社にあり、これを「元和神楽歌本」と呼び、春日社の社伝神楽に関する現存最古の奥書をもつ極めて貴重な史料と指摘した⁽¹²⁾。また、大山の「倭舞歌譜」第二帖の奥書「保安三年三月 春日神宮改正之譜也」の表記から本田は永田衡吉と同様の認識に立ち、保安本がすでに存在している槇子本はそれによったものではなかったかとの見解を示し、大山本が「天下の孤本」と表現した。さらにこの保安本はじつは、大山阿夫利神社に伝習された「倭舞歌譜」第二帖であることを「春日の八乙女舞歌」の中で本田は検証した。

富田家は今日途絶し、その写本の原本の所在は不明のままである。

岩田勝は岡本彰夫氏の「春日社伝神楽が、その伝統の正しさと舞振の美しさの故を以て、明治の神仏分離を始めとする神道国教化政策上、欠くべからざる神道祭祀の厳修という課題において、国策の一環として、伝習が奨励されたという事実」を基本的に了解し、また「神楽伝習の立役者」として各地の著名神社へ次つぎに伝習した富田光美夫妻

の努力を高く評価するとした上で富田光美が伝えた春日社の神楽歌本の再検討を指摘している。¹³⁾

岩田勝は春日若宮社における神楽始行時期と富田楨子の「かすかの御子」を次の点から疑問視した。

① 春日若宮社の巫女舞始行時期

「やまかづら」奥書と「藤のしなひ」後書

「若宮には保安三年三月十四日よりはじまりける」

「春日社神楽歌」（春日文書第三三三号）奥書

「右当家伝来の歌なり所望にまかせ舞女へ伝へおくところ外へ見せましくものなり 元和二年十二月十五日 かすかの御子 富田楨子」

これらの表記によれば春日若宮社の巫女舞が保安三年から始まり、元和二年十二月に富田楨子が「その巫女舞」の譜を写したように受け取られるが、寛文三（一六六三）年春日大宮社で本格的な御神楽の始行にあたる「濫觴記」の「一御神楽始 保安三年三月十四日始而執行之、」から富田光美の錯覚か特別な意図かによって春日若宮社の巫女舞始行時期に錯誤があると岩田勝は指摘した。

② 「春日社神楽歌」奥書にある富田楨子の肩書表記

この神楽歌本奥書に記載された「春日社神楽歌」の日付表記、「かすかの御子」の「富田楨子」、「当家伝来の歌」の点について疑念があり、本田安次・岡本彰夫が共に引用した金刀比羅宮所蔵「八少女神楽入門名簿」所収「大和国春日神社八少女神楽伝統」の記載文「又寛永十七年延英ノ記ニ、預中臣殖栗連家富田延実妻楨子、神楽ノ道ニ通曉

シ、音節ヲ明メタリ、今社ニ伝フル所、皆楨子ノ末葉ナリト見エタリ」に対しても『寛永十七年ノ記』が春日大社に現存しないため、楨子筆とされる神楽譜には根本的な検討が必要としている。¹⁵⁾

第三節 春日社秘伝の倭舞・巫女舞が

初めて金刀比羅宮へ伝習

一般に各神社の神楽舞や歌譜は社内に秘匿され継承されるが、春日社の倭舞・巫女舞は神仏分離令後の明治元年十一月金刀比羅宮へ伝習され、春日社の神楽舞が社外に伝わる魁となった。

金刀比羅宮は象頭山金比羅大権現として庶民の信仰を集めていたが、神仏分離後は、権現号を金刀比羅宮と称え、金光院法印宥常が復飾し、琴陵宥常（ことおかひろつね）と改名して一山の神道化をはかった。

この復飾した琴陵宥常が明治元年八月に京都の富田光美から倭舞の伝習を受け、一月にはさらに富田光美から大和舞を、多忠誠より俳優舞と音曲の相伝を受けた。また、神社祭祀の作法が翌明治二年一月に神祇伯白川家の古川躬行から指導された。¹⁶⁾ 富田光美は「倭舞伝習ノ式」中の「倭舞富田家相伝乃統」富田家系図第十六代延俊の注釈で「所望ニマカセ諸国大小神社祭式ニ用候様仕度明治元年十月神祇省へ上申願書二御付級（ママ普及か）大和国風ノ四字相除キ神代俳優舞ト可称候事」と富田家相伝の倭舞・巫女舞を「神代俳優舞」と称え、諸社へ伝習しようとする意図があったことが伺える。

春日社から金刀比羅宮に伝習された倭舞と巫女舞の歌譜を伝存史料から対比してみる。明治三年富田光美が著した「やまとまひ歌譜」と

金刀比羅宮の「大和舞歌譜」との対比が史料三A・三B^①で、両者の特徴は以下の三点である。

倭舞歌譜の採否

春日社にあって金刀比羅宮にない歌譜(「印」は神主舞「常世」・諸司舞「三歌別歌」・幣歌別歌「御饌歌別歌」・御酒歌別歌「立歌別歌」の六歌に対して、金刀比羅宮にあって春日社にない歌譜は諸司舞「音取」・「進歌」・「御酒歌酒之神」・「解斎歌」の四歌である。

配列の違い

春日社の「立歌」が金刀比羅宮の諸司舞に移動している以外は、春日社と金刀比羅宮との配列はまったく同じである。

歌譜の相違 ひらがなと漢字の差は別にして歌譜は同じ内容である。

全体として春日社と金刀比羅宮の歌譜は、金刀比羅宮の諸司舞「音取」「進歌」「立歌」の三歌が最初に挿入された他は、まったく同じ内容である。

次に、明治七年富田光美が著した巫女舞の歌譜「藤のしなひ」と金刀比羅宮に伝習された巫女舞歌譜(金刀比羅宮ではこれを八乙女舞と白拍子舞とからなる「諸舞」と称する)とを比較したものが史料四A・四B^②で、両者の特徴は以下の五点である。

巫女舞歌譜の採否

金刀比羅宮「諸舞」最初の「進歌」「立歌」は、春日社にはないがこの二歌を除き、他すべての歌譜は共通している。
配列の違い

春日社と金刀比羅宮との歌譜の配列は大きく異なる。

春日社の「発題」「前段一組」「中段一組」「後段一組」の順番に対して、金刀比羅宮は、第一項「諸舞 八乙女舞」の「進歌」「立歌」「祝歌」に「鈴舞歌」(春日社の「舞の初にまをす詞」)が挟まれ以下、初段・中段・後段が並び、第二項「白拍子舞」に春日社の「乱拍子」・「中の歌」がそれぞれ「初段歌」「中段歌」「後段歌」に編入され、最後に第三項として「宮風」が置かれている。

歌譜表現の相違

春日社の歌譜に対して金刀比羅宮の歌譜は史料四A・四Bの傍線部分のように金刀比羅宮に即した歌譜表現となっている。

春日社

金刀比羅宮

「発題」一歌「若宮の。…」 ↓ 「諸舞」初段一歌「於ほかみの。…」

「発題」二歌「みまさゝらめや」 ↓ 「諸舞」中段二歌「しのばざらめや」

「発題」三歌「かすがのはらに。」 ↓ 「諸舞」初段後段歌「ことひらやまに。」

「前段一組」白拍子の歌「かすが山。」 ↓ 「白拍子舞」初段「かみやまや。」

「前段一組」中歌「ミかさやま。」 ↓ 「白拍子舞」初段中歌「よろづよも。」

「中段一組」初の歌「みかさやま。」 ↓ 「中段」初の歌「…かみやまの。」

史料四A 巫女舞神楽歌譜比較

春日社「神楽歌譜」
(明治七年九月富田光美写「藤のしなひ」『日本庶民文化史料集成』第一卷一九七四年所収)

舞の初にまをす詞

此のやをとめは。たがやをとめぞ。ちハやふる神のみまへにたつや。はなのやをとめ

舞員不定 詞一首毎曲換而唱之

一の哥 若ミヤ 若宮の。みかげうつらふ。ますかき。くもりあらせて。かへりみたまへ

二の哥 珍らしな けふのかぐらの。やをとめは。神もうれしと。みまさまらめや

三のうた 神のます 神のます。かすがのはらに。たつや八咫女。やをとめは。わがやをとめは。かミのやをとめ

四の歌 神のます 神のます。かすがのほらに。たつや八咫女。やをとめは。わがやをとめは。かミのやをとめ

前段 組

初めの歌 かが山。いはねのまつは。いはねども。千年をみどりの。いろにしり

白拍子の哥 乱拍子の哥 乱拍子の哥。おとせね。万歳のひまきは。みまにミツ

中のうた 中のかきやま。おひそふ松のえだごと。たえずもきみが。さかゆべきかな。ヤレさかゆべきかな

末の歌 色かへぬ。まつと竹との。まつとたけとの。まつとたけとの。すゑのよに。

いづれひさしとや。いづれひさしとや。君のみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。君のみぞみむ。きみのみぞみむ

史料四B 巫女舞神楽歌譜比較

金刀比羅宮「八乙女舞」歌譜
(金刀比羅宮蔵『金刀比羅宮楽歌典』正本)

第一項 諸舞 八少女舞

進歌 (少女等に) をとめらに。をとちたそひ。ふみならず。にのみやこは。よろずのみや。

立歌 (皇神) すがみは。よきまつれば。あすよりは。あけのころもを。けころもにせむ。

祝歌 (祝衣) せんざいや。ちとせのせんざいや。よろづよのまんざいや。

鈴舞歌 舞の初にまをす詞

この八乙女 このやをとめは。たがやをとめぞ。ちハやふる。かみのみまへにたつや。はなのやをとめ

初段歌 (天神) 於ほかみの。みかげうつらふ。ますかき。くもりあらせて。かへりみたまへ。

初段歌 (君が代) かが山。ひさしかるべき。ためしにや。かみもろけむ。すみよしのまつ

末の歌 (色変へぬ) いろかへぬ。まつとたけとの。まつとたけとの。すゑのよに。

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

いづれひさしとや。いづれひさしとや。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ。きみのみぞみむ

「後段一組」白拍子歌「所願もよしなし」↓白拍子歌「しよぐわんも。たのみあり。」

「後段一組」末の歌「きミのミぞみむ」↓「後段」末の歌「きみぞかぞへむ」

歌詞繰返し表現の違い

春日社

金刀比羅宮

「前段一組」初めの歌「ヤレすミよしのまつヤレ」↓金刀比羅宮
はない

「前段一組」末の歌中程「いづれひさしとや」二回 ↓三回反復

「中段一組」末の歌末「こゝろをや」五回 ↓六回反復

「後段一組」中の歌「ヤレはるかなるかな」五回 ↓五回反復

「後段一組」末の歌「君のミぞみむ」五回 ↓「きみぞかぞへむ」六回反復

歌詞一字違い

春日社

金刀比羅宮

「発題」二の歌「めずらしな」↓「諸舞中段」二の歌「めずらしき」

「後段一組」はじめの歌「万代の」↓「諸舞後段」初めの歌「よろづよを」

以上を整理すると春日社と金刀比羅宮との顕著な違いは、

①歌譜の配列では、春日社の前段・中段・後段の「中の歌」と「白拍子」を分離して金刀比羅宮の「白拍子舞」の中に「中の歌」と「白拍子の歌」を前後入れ替えたこと。

②歌譜の表現では春日社の「発題」一歌「若宮の」、「発題」三歌「かすがのはらに」、「前段一組」白拍子の歌「かすが山」、「前段一組」中の歌「みかさやま」、「中段一組」初めの歌「ミかさやま」が金刀比羅宮では順に「於ほかみ」、「ことひらやまに」、「かみやまや」、「よろづよも」、「かみやまの」と金刀比羅宮に固有の表現に変更した二点である。他には各段の「末の歌」で繰返し回数、表現上の変更がされており、富田光美が春日社から金刀比羅宮に倭舞・巫女舞を伝習した際にこのような改変をしていることが分かる。

ここで春日社・大山阿夫利神社・金刀比羅宮の倭舞・巫女舞の差異を整理してみる。

倭舞歌譜は、春日社と大山阿夫利神社との対比では春日社の「神主舞」が大山の「倭舞六位舞歌」へ、春日社の「幣歌」く「直会歌」が大山の「倭舞歌」の前へ移動する相違があるのに対して、春日社と金刀比羅宮とは「立歌」の移動を除き同じ配列である。

巫女舞歌譜は、春日社と大山との対比では春日社の「発題四首」が大山の前段・中段・後段に分割挿入され、「舞の初にまをす詞」と「舞はてゝまをす歌」とで初段・中段・後段を括るのに対して大山の「舞乃初に申す舞」と「舞はてゝ申詞」は前段・中段・後段の各段で括る点が大きく異なる。これに対して春日社と金刀比羅宮との対比では、春日社の前段・中段・後段の各段が「初めの歌」「白拍子の歌」「乱拍子の歌」「中の歌」「末の歌」の各歌がセットで構成されているのに対して、金刀比羅宮は「乱拍子歌」を省き、「初めの歌」「末の歌」の組を第一項「八少女舞」とし、「中の歌」「白拍子の歌」の組を第二項「白拍

子舞」と分割し、春日社の「発題四首」を第一項「八少女舞」に分割挿入したことが春日社と金刀比羅宮の顕著な相違である。このような違いは春日社の巫女舞を他社に伝習する時の差別化の措置といえる。

本田安次は大山阿夫利神社に伝存する「倭舞歌譜」第二帖摘録の奥書から「保安本」が別に存在していて富田楨子は元和二年にそれを書いたのではないかと推論したが、富田家の保安本もしくは原本の所在が不明なのでそれ以上の検証はできない。

第四節 春日社の倭舞・巫女舞を伝習した

富田家と富田光美

富田光美（一八三一～一八九六）は、春日社社家のうちの中臣系の一家である富田家の第十三代目当主として幕末維新を生きた。

富田家は古代大和の風俗舞である倭舞を伊勢より伝授を受け一子相伝で伝承したと伝えられ、宝暦四（一七五四）年の大賞会再興に伴う和舞（倭舞）奏楽の際、宮中楽人へ伝授した記録が残り、さらに元治元（一八六四）年、公祭である春日祭旧儀再興の際も富田光美が家伝の倭舞を公開したとされる¹⁸。慶応四年三月の神仏分離令を受け、春日若宮社を差配していた興福寺門跡知心院・大乘院・一乗院を筆頭に院家・学侶らは春日社への復飾を果たした。以後、春日社の神勤及び春日大宮祭・春日若宮祭は旧来神司と新神司とが合同で行い、この時古儀に倣う倭舞・巫女舞の伝習を富田光美が行った。明治維新後の富田光美は、明治二年二月從三位宣下 明治三年四月大藏省准十二等出仕同年十月用度権大祐准席 明治四年五月諸社神官位階被止候 明治五

年六月春日神社権祢宜拝命 同年十月教導職少講義拝命 明治六年九月寒川神社祢宜拝命という経歴を持つが、この時期に富田光美は、倭舞伝習に関する著作を続けて発行した。

明治三年五月の「やまかづら」の内容は、寛延元（一七四八）年大賞会の和舞再興時に富田家伝来の倭舞を「春日社倭舞傳來の事」、「富田家蔵御饌歌古譜」（酒殿・御饌・御酒・大幣）などが「寛治七年行幸倭舞図」、明治二年の時の「神主倭舞図」、「御巫神楽図」とともに記されている²¹。

明治三年九月「やまとまひ歌譜」の内容は、散位古川躬行・平忠秋の序文につづき倭舞装束調度や歌の由来が付された歌譜二十首で構成されている²²。古川躬行はこの両書に序文を寄せ、富田光美の倭舞が古式に倣う舞として推薦した。

明治一六年三月の「倭舞伝習之式」は倭舞伝授之式・倭舞及神楽舞相伝ノ事・神主和舞・諸司和舞・倭舞富田家相伝之統・御巫神楽中興富田相伝之統・諸社倭舞社伝之事・音楽始テ伝習ノ事・春日神社神楽ノ事・神楽再興ノ事など富田家と富田光美が倭舞・巫女舞の再興、伝授、諸社への伝習など多岐にわたる書である。松原秀明はこの書のト書で本書は善本と言いい難く、記事の誤り、誤字、脱字も少くなく「原本、もしくはよりよい写本の発見が望まれる」と断った上で本書を紹介している²³。なお「倭舞伝習之式」は富田光美が全国著名神社への伝習を終えた後の執筆である。

第五節 雅楽局設置と明治四年の太政官措置

明治元年十月の明治天皇の東幸と翌二年三月の再幸によって雅楽制度と家元制度は大転換がはかられた。明治天皇が京都から東京に移ったことで宮中行事をはじめ外国使節の謁見時や楠公祭・招魂祭（明治元年）、賢所御神楽・祈年祭・神武天皇祭の際には必ず雅楽の演奏が催されたからである。従来、京都の楽人によって京都で雅楽演奏が行われてきたものが東京遷都により祭典の中心が移されたことから雅楽演奏制度の解体と再編が並行して起こった。

明治三年一月、太政官内に雅楽局が東京に仮設置され雅楽を演奏する大小伶人が置かれた。²⁴同時に雅楽の伝承をしてきた琵琶道・神楽道・琴道・和琴道の各家元に対して、その相伝が停廃止された。²⁵新たに設立された雅楽局は

①神楽の人数は華族に限定せず熟達者に開放し、大曲・秘曲はすべて朝廷に返上する

②雅楽局の管理運営を四辻家から切離し東京に雅楽長・助、西京に権助を設置する

③定員は大伶人一〇人、少伶人一〇人、伶生一五人とし、東西に各々配置する

④大祭・中祭・小祭ごとに勤仕人数・演奏曲数を編成する

⑤楽所では、神楽・大歌・東遊・倭歌・催馬楽・朗詠、琵琶・琴・和琴を錬磨する

などを定め、雅楽演奏体制の大編成が行われた。²⁶この後、明治四年一

月に雅楽稽古所が、同年四月には官制改革により式部寮が置かれ、伶人の職務・職制がさらに定められた。これらの再編の結果、家元制度のもとで相伝されてきた雅楽演奏は明治政府が一元的に管理する体制に変革された。この変革は倭舞を相伝してきた富田光美にも当然影響が及んだ。このころ富田光美は大蔵省に出仕していたが、奈良県を通じて太政官弁官へ次の伺が出され、太政官より出された回答が以下の内容である。²⁷

「四年四月 富田從五位倭舞相傳ノ處分

奈良県伺弁官宛

富田從五位相伝倭舞ノ儀ハ御廃シ相成候処当人ハ勿論社家一同悲嘆別紙ノ通り嘆願書差出申候古通富田へ被仰付置候テ後日ノ害ニモ相成候事ニ御坐候ハ、不被為得止儀ニ御坐候得共左様ノ譯柄ニモ御坐アルマシク譬伶人ト二重ニ相成候テモ御差支ノ廉無之哉ニ奉存候間嘆願ノ通御採用相成候ハ、夫々面色艶ハシク人氣モ進ンテ御祭事向行届候事故神慮ニ相叶ヒ可申儀ト奉存候已上 四年四月奈良県富田從五位倭舞願出タ家伝ノ称ヲ廃シ何レノ社ニ於テモ其社之伝ト可称 就テハ是迄和琴四辻家ヨリ伝受仕来候処自今被止候間舞以下一社中廣ク修練可為勝手此旨取計可致候事 但自来御下行并小忌別紙闕」

四辻家の和琴伝授を差し止め、富田光美相伝の倭舞を春日社「一社中廣ク修練ナスベク勝手」とする特別措置が太政官より示された。この措置により富田家が家元として相伝した倭舞は停止されたが、明治政府公認のもとに「春日社社伝」として富田光美が社外へ伝習するこ

とが認められた。

明治四年二月、大蔵省出仕を免職になった富田光美は翌年六月、春日社権祢宜の職に復帰し、富田家が相伝してきた倭舞を同年十一月二七日の春日若宮祭から「春日社社伝の舞」として執行することとなった。大山阿夫利神社の「倭舞歌譜」第二帖摘録(巫女舞)「奥書」に「明治五年十一月奏進」とあるのは春日若宮社で巫女舞が行われたことを指す。明治元年の金刀比羅宮への伝承は金刀比羅宮の求めに応じた、いわば「私的」な伝習であったのに対し、明治三年の雅楽演奏制度の再編措置を経た太政官公認の「公的」な伝習といえることができる。このように富田家相伝の倭舞が「春日社社伝神楽」として明治政府の公認のもとに春日社社伝の神楽舞が諸社へ伝習され始めた。⁽²⁸⁾

第六節 教部省による伝統芸能の統制と

雅楽・神楽の伝習解禁

明治元年以来、神祇・祭祀等を所管してきた神祇官は役割を終え、明治四年三月神祇省、さらに翌年には教部省へと組織替えされた。この教部省は神道・仏教及び国民教化を専ら管轄する中央官庁となり、皇室祭祀や儀式は式部寮に移された。教部省の職務は「教部省職務並びに事務章程」に定められ、神仏各派の教義内容、教則、社寺廃立などを管理するほかキリスト教解禁・女人結界禁止などを国内の宗教政策を一元的に統括した。中でも明治五年四月「三条教則」(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴朝旨遵守)を定め、大教宣布の浸透をはかるため大・中・小教院を通じて神仏合同布教運動による国民教化の大運

動が展開されることとなった。

その一方で、大教宣布と「三条教則」の徹底のために「人心風俗を乱す」と見なされる芸能は国民教化を阻害するとして広範囲に統制された。⁽²⁹⁾

「雅楽ヲ始都テ管弦舞曲ヲ以テ渡世致シ候者、以来左ノ条々取締可相立見込。

一 歌曲唄本古作新製ニ不拘、芝居仕組等ニ至ルマテ都テ風俗ヲ敗リ倫理ヲ乱リ候類、斟酌適宜ニ相改可申事。
一 時々被仰出之御布告筋并地方ノ諸規則、教部省御旨意柄ノ趣等厚ク遵奉致シ、従来制外者等ト唱居候悪弊ヲ一洗シ、不作法不檢束ノ儀有之間敷候事。

一 淫佚放蕩ノ甚敷ニ流レ、奢靡醜猥ノ風習ヲ世上ニ染播致シ候儀堅ク相慎ミ、身分相應行誼相慎正路ニ渡世可相営事。

右渡世向ノ者共、毎藝何レモ其仲間内ニ於テ重立候者相選ヒ申出候ハ、右取締申付、時々呼出シ、達方相受、御旨意柄諸規則筋等仲間一統へ通徹方行届候様可致事。

右之通見込相立此段相伺候也

壬申四月 御用掛 江藤副議長・福羽教部大輔・嵯峨教部卿
正院御中

この他、教部省は社寺への宗教活動や民間宗教者への活動を厳しく統制する施策もとった。

明治六年一月には梓巫・市子らの祈禱禁止⁽³⁰⁾

「従来梓巫市子並憑祈禱狐下ケ杯ト相唱玉占口寄等之所業ヲ以テ人

民ヲ眩惑セシメ候儀自今一切禁止候条於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事」

また、明治六年八月には、黒住教・富士講・御嶽教・不動講・観音講などの神仏講の結社に対しては「教会大意」に照準して認可を下す達書を発令した。³¹⁾

その一方では華族・旧楽人に限定されてきた神楽の伝習が、明治六年五月には一般人に対して解禁された。³²⁾

「神楽伝習之儀従前華族及旧楽人ニ限り候処、自今人民一般被差許候事。

但、志願之者ハ雅楽稽古所へ罷出指図ヲ可受、舞楽伝習之儀モ可為同様事」

この神楽の伝習にあたっては「雅楽稽古所規則」も設けられたが、雅楽稽古所において稽古をすることが条件であった。神楽伝習が一般に解禁されたとはいえ、神楽の内容いかんでもあった。

明治七年二月東京府下の郷神楽職惣代から、神祇の筋をわきまえないで（神楽料）を食るものがあるので郷神楽を取締まる必要がある、との願書が出されたが教部大輔の穴戸璣は、「其府下神社祭礼之節、於神前執行致神楽中、醜態有之趣ヲ以、別紙ノ通、警視庁ヨリ申越処、右等之所作致候向有之候テハ、大ニ敬神之本意ヲ失ヒ、其甚風教ヲモ害候次第ニ付、猥褻ニ涉リ候廉々ハ、於其府屹度御差止有之度、仍テ此段申入候也。明治七年五月二七日」³⁴⁾と回答した。あくまでも「三条教則」を逸脱しないことが、神楽伝習の条件であった。

このように、明治四年四月、太政官弁官より下された先の「富田從

五位倭舞願出タ家伝ノ称ヲ廃シ何レノ社ニ於テモ其社之伝ト可称」との達は、大教宣布運動を背景として雅楽伝習を一般人に解禁する布石とも解され極めて「特別な措置」であったと理解できる。

教部省は、大教宣布をもとに「三条教則」を定め国民教化のために明治五年三月に神官・僧侶・民間宗教者を教導職に任命したが、その教導職の「少講義」に富田光美は同年一〇月に任命されていた。³⁵⁾明治六年一月、国民教化の中央機関として芝増上寺に大教院が開設され以後、各府県に中・小教院が全国に設立されていたが、この大教院の神殿が完成した六月、富田光美は芝増上寺・大教院において春日社社伝の倭舞伝習のため上京した。³⁷⁾

おわりに

一

富田光美が倭舞・巫女舞を春日社から諸社へ伝習した魁は金刀比羅宮である。

金刀比羅宮へ伝習された倭舞は「大和舞」、巫女舞は「諸舞（八乙女舞・白拍子舞）」の名称で伝えられた。春日社と金刀比羅宮の倭舞歌譜はさきに対比したようにほぼ同じ内容である。富田光美が明治九年に書写した大山の倭舞歌譜は、「神主舞歌譜」と「祭事舞歌譜」が「諸司舞」を間にして前後入れ替える違いはあるが、歌詞は同じであり、明治初年当時、富田光美・富田家が相伝していた歌譜そのものといえよう。

金刀比羅宮へ伝えられた巫女舞は「諸舞」と名を変え、春日社の一

続きの巫女舞歌譜を「八乙女舞」と「白拍子舞」と区分し、「若宮」を「おほかみ」、「かすがやま」を「かみやま」など金刀比羅宮固有の歌詞に変更された。この金刀比羅宮の「諸舞」歌譜は「元和二年十二月富田槇子書写」の春日社神楽歌に依っていることは明らかだが、大山に伝習された巫女舞歌譜と春日社神楽歌の歌譜では春日社の「発題」が大山歌譜の前半・中段・後段の冒頭に分けて挿入する違いが最も大きい点であった。この大山阿夫利神社に伝習された「倭舞歌譜」の奥書にある「保安三年三月春日神宮改正之譜」と「御巫槇子写」との箇所から、富田槇子が書写した親本が別に存在することを本田安次・岩田勝らから指摘された。これらの疑いは、富田光美が春日若宮社の巫女舞の創始を保安三年月一四日に春日大宮社で神楽の創始された同じ時期に置いたことに端を発している。春日社・大山阿夫利神社・金刀比羅宮のそれぞれの倭舞・巫女舞歌譜の対比と永田・本田・岩田らの指摘から大山に伝習された倭舞・巫女舞歌譜は、保安三年当時の春日若宮社の歌譜をとどめていることが濃厚である。

二

春日若宮社の巫女舞始行を富田光美が保安三年三月としている点を岩田勝は「富田光美には、なんらかの錯覚か、特別な意図があったのではないか」としているが、この指摘は富田光美に以下のような背景があったと考えられる。

① 春日祭が復活された当時、神道国教化の中で富田光美は古儀に倣う神楽再編を要請される立場にいたこと。

近世末期、朝儀再興の一連の動きの中で賀茂祭・石清水祭につづい

て慶応元（一八六五）年、春日大宮の春日祭が復興され、朝廷から衆人が近衛将監・将曹の資格で派遣された官祭としての復活であった。この前年、富田光美は三十四歳で従四位下大和守という春日大宮社の責任ある地位にあった。

② 近世期、春日若宮社を支配していた大乘院・一条院らの復飾により神仏習合時の倭舞・巫女舞を、古儀に倣う祭祀への改変から、「やまかざら」「やまとまひ歌譜」「藤のしなひ」など倭舞・巫女舞の伝習書が必要とした。

③ 雅楽局設置に伴う家元制度廃止により富田家家伝の倭舞存続を強く太政官へ願ひ出たこと。

東京遷都に伴い雅楽局が設置され京都・天王寺・南都の三方衆人が東京に集められ、堂上家・地下衆人の家元制度の廃止により、富田光美は倭舞の一家相伝を差止められた。富田家による倭舞相伝は停止されたが、太政官の特別措置により、「春日社伝」と権威づけることで富田家・富田光美が相伝してきた倭舞を春日社から諸国の神社に伝習することが公認された。明治五年十一月二十七日春日若宮社への倭舞伝習はこれを受けての動きである。

明治五年十月二十日、富田光美は教導職少講義に任命されるが、以後教部省の働きかけで大・中教院においての倭舞・巫女舞伝習を、諸国著名神社への伝習を開始した。他方で、教部省は、大教宣布、「三条教則」の浸透を阻害する諸芸能には厳しく統制する施策を講じていた。

明治維新期、富田光美は古川躬行・本居豊顕、権田直助らの国学者

との接触や関連が推測されるが、これらのことは今後の研究課題とする。

〔注〕

- (1) 永田衡吉著「大山阿夫利神社の神楽」(神奈川県教育委員会編『神奈川県民俗芸能誌』五一八～五三八頁 所収 一九六六)
- (2) 本田安次著「春日の八乙女舞歌」(芸能学会編『芸能』三〇巻九号所収 一九八八)
- (3) 財団法人春日顕彰会「春日大社社伝神楽調査報告」一九七五
- (4) 財団法人春日顕彰会「和舞・社伝神楽の伝承並びに比較調査報告書」一九八八
- (5) 岩田勝「春日社における神楽祭祀とその組織」(民俗芸能学会編集委員会編『民俗芸能研究』一三号所収 一九九一)
- (6) 財団法人春日顕彰会「和舞・社伝神楽の伝承並びに比較調査報告書」八五～九二頁
- (7) 前掲書 七一～七五頁
- (8) 財団法人春日顕彰会「春日大社社伝神楽調査報告」一三～一九頁及藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第一巻 神楽・舞楽所収「藤のしなひ」(一九七四 三一書房)
- (9) 松原秀明発表「倭舞伝習之式」(『神道宗教』六四号所収 一九七一 金刀比羅宮図書館蔵)
- (10) 注(2) 本田安次論考一四頁
- (11) 注(1) 永田論考五三一、五三五頁
- (12) 財団法人春日顕彰会「春日大社社伝神楽調査報告」一九七五 一三頁
- (13) 注(5) 一九頁
- (14) 「濫觴記」(神道大系編纂委員会編『神道大系』一三 春日 一九八五)
- (15) 注(5) 岩田論考一四～一八頁。本田安次・岡本彰夫の引用は『和舞・社伝神楽の伝承並びに比較調査報告書』二、一〇頁による。こ

れと関連する史料は富田光美「倭舞伝習之式」中に「御神楽中興富田相伝之統・「神楽再興ノ事」があり、「神楽再興ノ事」では「近年衰微ニ付、明治五年十一月廿七日、若宮祭神楽ノ事、教部省ノ許可ヲ受ケ、古へ復シ行ハレケリ、光美擔當中モ更ナリ、妻志豆ヘモ大宮司水谷川忠起ヨリ今度当社神楽再興ニ付富田家伝ノ神楽歌舞残ナク伝習致ベク猶神楽殿へ出仕巫子教授方申付ラレタリ」と記され、巫中興元祖榎子が富田光美の妻志豆に継がれたことを系図で示している。

- (16) 金刀比羅宮社務所蔵『金毘羅庶民信仰資料集年表編』四四～四五頁 一九八八
- (17) 史料三B・史料四Bはともに『金刀比羅宮楽歌典』(正本)によっているがこの楽歌典には明治元年のものがなく、大正七年一二月琴陵照宮司によって一部改訂された歌譜によっている。御饌歌・御酒歌・御幣歌は明治元年、富田光美より伝えられた歌譜で、祈年祭・新嘗祭・例祭時に奏楽されたことが注記されている。また、解斎歌は春日社になかったがこの改訂の時に加えられた。
- (18) 岡本彰夫「富田光美という人」四〇頁(奈良国立博物館『おん祭と春日信仰の美術』二〇〇七)
- (19) 辻善之助・村上專精・鷲尾順敬編『明治維新神仏分離史料』第八巻近畿編(二)(名著出版二〇〇一)「御沙汰被為有候御旨趣奉敬承候、抑春日社之義ハ、自素社家禰宜之輩在之候得共、唯神前仕而巳之所役ニ有之、興福寺一派ニ於テハ、総而春日社ニ致関係、年中之神供米ヲ始、山木并燈籠神鹿等之義ニ至ル迄、悉興福寺之差配、就中若宮祭祀之大宮、薪能等之義ハ、悉興福寺一派ニ於テ差配、尤大乘院、一乗院之両門跡、相代リ別当職蒙勅許」
- (20) 神奈川県「寒川神社文書一一」
- (21) 注(4) 八五～九二頁
- (22) 注(4) 七二～七五頁
- (23) 富田光美著「和舞伝習之式」(金刀比羅宮蔵)(松原秀明発表「倭舞伝習之式」『神道宗教』六四号所収 一九七一)

- (24) 塚原康子著『明治国家と雅楽』一五、三七頁 (有志舎 二〇〇九)
 楽人は、雅楽を専門とする地下官人で江戸時代は三方楽所に属していたが、雅楽局設置以降はこの旧楽人を伶人に移管した。
- (25) 『太政類典』第一編四六卷九三条による。以下は相伝停止の主な家。
 ①伏見宮家・菊亭家・花園家・西園寺家に対して、琵琶道伝授の停止
 ②綾小路家・持明院家に対しては神楽道などの伝授停止と曲所の廃止
 ③四辻家に対しては、神楽付物・琴道の停止と三方楽所執奏の廃止
 ④三方楽所の宮家・堂上家に対し、琵琶・箏・和琴・神楽道の伝授権を停止
- (26) 注(24) 五五頁
- (27) 『太政類典』第一編四六卷一〇一 (国会図書館蔵)
- (28) 富田光美著「倭舞伝習之式」による諸国神社への伝習は以下の通り。
 明治四年一月談山神社、明治五年枚岡神社、明治六年住吉神社、
 明治七年鹿島神社・香取神宮、明治八年射水神社・田島神社・貫前
 神社・浅間神社、明治一〇年出羽三山神社・塩竈神社、明治一一年
 大山阿夫利神社・筑波神社・三島神社、明治一二年熱田神社、明治
 一三年稻荷神社
- (29) 明治五年四月「雅楽・能狂言俗楽の教部省管轄」二四〇頁 (『日本近代思想大系』一八「芸能」)
- (30) 「明治六年一月 教部省達第二号」(『法令全集』)
- (31) 「明治六年八月二四日 教部省達番外」
- (32) 「太政官第一七五号」(『太政類典』第二編五〇卷 国会図書館蔵)
- (33) 「式部寮伺 雅楽稽古所規則書別紙之通致改正度候條此段相同候也 五月二八日式部
 伺之通 五月二九日 別紙
 一 神楽及ヒ舞楽以下伝習之儀雅楽稽古所へ出願候輩ハ其区戸長之添書ヲ差出サシムヘキ事
 一 神楽伝授(習を訂正)ノ儀ハ大伶人ニ限ルヘキ事
 一 舞楽以下伝授(習を訂正)ノ儀モ大伶人ニ限ルト雖トモ中少伶人補助ノ儀ハ不苦候事
- (34) 一舞楽以下大曲ノ外者望ニ任セ教授致スヘキ事
 一舞楽以下一技ト雖モ熟練スル者ハ其大曲相伝并教授不苦候事
 但、稽古所ニ於テ教授スルハ伶人ニ限ヘキ事
 一教授并大曲相伝ノ人員姓名月末ニ当寮へ届出ヘキ事 式部」
- (35) 『日本近代思想大系』一八「芸能」二五〇頁
- (36) 神奈川県「寒川神社文書一一」
- (37) 『太政類典』第二編五〇卷四六 (国会図書館蔵)
 「大教院神殿建営成功ニ付本月中旬 御鎮座ノ節舞楽執行ノ儀ニ付別紙ノ通教部省ヨリ申出候右御許容相成候哉此段相同候也 六月二日式部」
- (38) 注(4)三頁 「八少女神楽入門名簿」(金刀平羅図書館蔵)の「大和国春日神社八少女神楽伝統」添書に次の内容がしるされている。
 「明治四年一般世襲ノ職ヲ解カレタレドモ、古ヘニ定置タル神楽ノ業ハ神巫等モ能ク伝ヘ習ラヒテ今ニ絶ズ、本社ニ行ハレケリ、猶明治五年十一月廿七日、春日神社大宮司小(水)谷川忠起ヨリ今度当社神楽再興ニ付、富田家伝ノ神楽舞残ナク伝習教授方被申付、富田光美、同静子俱ニ改正ノ事業ヲ遂グ、又明治六年九月各社ヘ伝習致候様教部省ヨリ被命、大教院ヘ伝習ノ為ニ上東京ノ事」。
- (39) 注(5) 岩田勝論考一八頁
- (40) 本稿作成に際し『金刀比羅宮楽歌典』を閲覧させていただきましたことに金刀比羅宮称宜科野 齋氏に深謝いたします。 以上
- (41) (いいだ たかお 文学研究科日本史学専攻博士後期課程
 (指導教員：原田 敬一)
 二〇二二年十月一日受理